

あ　と　が　き

過去10年間にわたっての文部省科学研究費（特定研究）の補助によって行われた本懇談会の活動を今ここにふりかえてみて、環境問題を扱う研究がこんなに広範な分野を包含していたのか、また、それぞれの分野がこんなに相関連していたのかを改めて知らされた思いがする。

自然と人間とが調和のとれた形で共存していくための適確な方法を打ち出すためにはこれらの諸分野の総合化による多面的な解析が不可欠である。そのためには先ず、自然の構造と機能についてしっかりと理解することが必要であることは言うまでもない。すなわち従来ややもすると自然のしくみをスタティックにとらえるきらいがあったが、自然はきわめてダイナミックに動いていることをもう一度認識しなければならない。このような自然の実態の把握の上に立ってはじめて自然への人間のかかわりがとりあげられることになる。

昭和53年度に本懇談会が発足して昭和56年度までの4年間は、「信州の自然環境モニタリングと環境科学の総合化に関する研究」（座長、教養部松田松二教授）をテーマとして、文字どおり信州の自然環境の実態をあらゆる分野から個々に正確に把握し、それらの成果の総合化をはかろうとした時期であった。また、広範な専門分野の総合化のためには学部の壁を乗り越えた広い視野からの研究が必要となり、いわゆる学際的な研究の推進に力を入れた時期もあった。すなわち、これは今日の本懇談会の研究・教育両面にわたる活動の土台作りの時期であったわけである。

つぎに昭和57年度から昭和59年度までの3年間は、「信州の環境モニタリングと地域計画」（座長、医学部釘本完教授）をテーマとして、過去4年間の成果をふまえてさらに環境科学に関する研究の展開を図った時期である。ここでは信州の自然環境の実態の把握を継続して行うと同時に、自然と人間とのかかわりについて考えて行く研究も扱った。この時期の特徴は本プロジェクトについての学際的な研究体制がやっと軌道に乗りはじめて本懇談会のメンバーも各学部において急増しお互いの情報交換、研究活動や討論会などが活発に行われたことにある。したがって環境問題に関する学際的な研究が板について研究がどんどん進んで来た時期といえよう。

つづいて昭和60年度からは、今までの成果を生かし、「信州の環境保全と地域計画」

をテーマとして、さらに研究の飛躍を期して出発して現在に至っている。この時期の特徴は、現在地域社会のかかえているいろいろな環境問題を解決するための具体的な方策について考えて行こうとしたことである。

このように、研究活動がいよいよ活発になりはじめ、成果が着実にあがってくるにつれて、環境問題に関する研究の重要さがますます浮き彫りにされて来ている。21世紀に向けて環境問題はさらに深刻になることが予想される。したがって学内外の研究者や自治体からのコメントも年々増加していることから、本プロジェクトチームの研究、教育活動が来るべき新しい時代に向けての日本の環境科学に関する研究・教育にきわめて重要な役割を担っているものと考えられる。そのためには、本プロジェクトチームによる研究が今後も継続して行われてさらに多くの新しい成果を生み、21世紀に向けて地道な努力を積み重ねて行かなければならない。また、学際的な研究を目玉にした本懇談会の活動が本学で現在具体化されつつある総合大学院博士過程構想の核となれば幸せに思う次第である。

(森本記)